

# 絵本の読み聞かせにおける「ねらい」について

## —加古里子の絵本を中心に—

山崎 英二

### 1 はじめに

#### 1-1 研究の背景

越谷保育専門学校で児童文学を扱う授業を担当させていただいている。保育の現場での絵本の読み聞かせを想定し、毎回1冊の絵本を選び、何を「ねらい」として読み聞かせるかをテーマにして授業を進めている。

絵本は、幼児の「人と話すことや聞くことが楽しい」という心情を育てるのに有効な文化財で、動物や物が言葉を話すなどの独自の世界を展開し、現実世界とは異なった次元を子どもに与える。また幼児の想像力を養い他人の気持ちを理解するなどの思いやりの心を育む効果も望まれる。幼稚園教育要領「言葉」で「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」と定められているように、ほとんど全ての保育者が絵本を教材として用いている。一方で幼稚園教育要領「言葉」の内容の取扱いで「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものである」と定められている。園生活の中で保育者や仲間などと言葉を交わす喜びを味わえるよう、的確に幼児を援助することが保育者に求められる。日常の文脈の中での身近な人との言葉のやりとりと、絵本のような非日常の世界で言葉に触れて楽しむこととの関連付けが、幼児の言葉の獲得に大きく役立つのである。

学齢期前の幼児は、自分で文字を読み解く前段階のいわば「声」の文化の中で生きており、彼らが絵本に触れる最も有効な方法は、大人による読み聞かせということになる。かつては親が子どもに対し「読み聞かせ」以前の「語り聞かせ」を行っていたが、時代の変化とともに家庭で物事を口から口へ語り伝える文化は廃れ、現代ではテレビやDVDなどデジタル機器がかつての「語り聞かせ」の役割を担っている。テレビ番組やDVDを幼児に与え、子どもを放っておく養育者も少なくない。このような意味においても幼児教育での絵本の読み聞かせの活動が担う役割は重要なものになってきている。

渋谷は「読み聞かせ」の定義を、「大人が子どものために自由な雰囲気の中かで、自らの作品理解、鑑賞の度合いを反映させながら、心をこめて話を読んできかせること」（渋谷1983, 189）としている。そこには子どもに絵本や児童文学の持つ面白さや楽しさ、美しさを経験させたいという大人の願いが込められる。また絵本の読み聞かせは、絵本の作者と幼児の間に保育者が読み手として参加するという大きな意義があり、絵本の作り手と保育者の共同作業により、双方の「幼児への思い」を融合させることができる。幼児はことばを聞きながらその場面を想像し、静止している絵の映像を自分で動かし、自分なりの意味を与え、作品の中に組み入れられた様々な要素を読み取っていく。また幼児同士も、問いかけや対話などの言葉のやり取りを通してイメージを広げていくことができる。そして保

育者や仲間と言葉を交わしながら絵本を楽しむことで、より豊かな言葉の広がりを感じ、仲間との共感や共鳴も生み出し、またクラスへの所属感や仲間意識も強化されることが期待できる。

## 1-2 研究の目的と方法

矢野(2013)は、公立図書館などで行なわれている「読み聞かせ」には特に「ねらい」を立てる必要はないが、教育活動の一環として「読み聞かせ」を行なう際は「ねらい」を明確にする必要があるとし、設定した「ねらい」に応じた絵本の選定の重要性を述べている。和田(1995)は、調査対象の保育者のおよそ半数が「ねらい」を意図することなく絵本を選んでいること、また「ねらい」を意図した場合でも、子どもの発達より読み聞かせる時期や季節、園の行事との関連を「ねらい」とする場合が多いことを報告している。また横山・秋山(2001)の研究では、保育経験が長くなるにつれ、幼児の発達や育ちを見通した絵本の選び方をするようになることが示されている。

保育の現場では、幼児の日々の成長・発達の実態に即した保育計画が求められるだろうし、それぞれの園には園内外の様々な事情があり、「絵本の読み聞かせ」の時間が定期的に、また安定的に取れるとも限らない。そのような状況下で、絵本の「ねらい」を体系的に設定し計画的に「絵本の読み聞かせ」を行うことは容易なことではない。保育者に絵本の「ねらい」を設定しなければならないという過剰な圧力をかけ、「絵本の読み聞かせ」の活動のハードルをむやみに高くするのも現実的ではないだろう。このような背景から本授業では、受講者の保育を志した契機や初心、絵本観などを尊重しながら、絵本を幼児に与える際の保育者の「思い」をいかに表現し幼児に伝えていくか、その「思い」を教育観という明確な形にして、絵本を読み聞かせる「ねらい」にどのように結実させていくのかという過程を学ぶことを目標としている。

2013年の7月の授業では、加古里子の『だるまちゃんシリーズ』を題材にして授業を行った。古来日本に伝わる玩具「だるま」を主人公にしたユニークな絵本を受講者がどのように受け止めるか、関心を持って授業に臨んだ。加古の作品に初めて触れる受講者も多い中、加古の絵本は評判が良かった。『だるまちゃんシリーズ』の保育の現場での有用性を多くの受講者が感じていたようである。

加古は絵本作家として多くの支持と高い評価を受けている一人である。たとえば2012年に全国学校図書協議会が選定した幼児(3歳～5歳児)対象の絵本50選では『だるまちゃん と てんぐちゃん』が選ばれている。また地域限定的な資料だが、2009年の東京都日野市の幼稚園教育の理解推進事業における市立幼稚園の保育者への聞き取りをまとめた「日野市の5歳児(園児)が親しむ童話・絵本のベスト50」では、加古の絵本が最も多く選ばれ、『からすのパンやさん』『どろぼうがっこう』『おたまじゃくしの101ちゃん』『にんじんばたけのパピプペポ』の4つが選ばれている。

本稿では、保育者が加古の絵本を「読み聞かせの教材」に選ぶと仮定した場合、どのような「ねらい」を設定して活動を実施できるのかを検討することにする。

## 2 加古里子について

本名は中島諭（さとし）。1926年福井県生まれ、絵本作家、児童文学者、工学博士。大学卒業後、民間企業に勤務しながらセツルメント活動を行ない、子ども会で紙芝居などの作品を創作した。1959年に絵本『だむのおじさんたち』を刊行後現在まで500点以上の絵本を発表している。子どもの遊びについて長年研究、蒐集を重ね、その成果を研究書『伝承遊び考』（2006a）などにもまとめている。

### 3 ねらいの設定

#### 3-1 「仲間と遊ぶ楽しさを味わう」

加古は川崎市で携わったセツルメント活動で長年にわたり直接子どもたちと接し、その時の経験を基に、子どもの「遊び」「楽しさ」を反映させた数多くの絵本を描いている。いたずら好き、泣き虫、好奇心が旺盛、食いしん坊、間が抜けているなどの幼児の特性を主人公に持たせ、子どもの普遍性を熟知した作家と言える。

まず前述した『だるまちゃん と てんぐちゃん』を見てみよう。一緒に遊んでいただくまちゃん と てんぐちゃんがお互いの持ち物を自慢し合い、だるまちゃんが てんぐちゃんの持ち物をほしがる。友だちの持ちものに興味を持ち、同じものを持ちたがる子どもの普遍性をよく捉えている。だるまちゃんの依頼に答えてお父さんのだるまどんが、家にあるものを並べて見せるシーンは圧巻だ。花、帽子、靴などがページいっぱい並べられる。自由に遊ぶことで混沌の中からルールや規則性をつくり出す経験を重ねる幼児期、泥だんご、木の実、葉っぱなどを子どもはよく並べる。大人になっても我々は何か同じ種類の「もの」を集めることが好きである。日本の古典においても「ものづくし」と呼ばれ、古くは「枕草子」で「うつくしきもの」「にくきもの」「はしたなきもの」「すさまじきもの」「うれしきもの」など「ものづくし段」として描かれている。古来人が好んだ発想なのだろう。絵本で並べられた「もの」の中に知っているものを見つけたり、並んでいるもの同士の似ている部分、違う部分を考えるなど、幼児の好奇心が大いに刺激されるに相違ない。後で挙げる加古の『からすのパンやさん』でも、ページいっぱいにおいしそうなパンが並べられている。

次に「だるまちゃん」の相手役として、やはり日本古来の「張り子の虎」から加古が創った「とらのこちゃん」が登場する『だるまちゃん と とらのこちゃん』を考えてみる。まず、だるまちゃんの赤ととらのこちゃんの黄という「色」を軸にして遊びが展開される。自分たちで土を掘ってつくったペンキで、お互いの体を縞模様に塗り木や竹も塗り、さらに「とらのまち」の道路や壁にいろいろな模様を描く。鼻歌を口ずさみながら夢中になって塗るだるまちゃん と とらのこちゃんは、落書きが好きな子どもの姿そのものだ。加古は子どもと接するなかで、遊びに熱中しどろだらけになる姿を見て来たのだろう。

『だるまちゃん と てんぐちゃん』『だるまちゃん と とらのこちゃん』では、「友だちと遊ぶ楽しさを味わう」と「ねらい」を設定できるだろう。

#### 3-2 「言葉を使うことを楽しむ」

加古の絵本は言葉のリズムが楽しく随所に歌が挿入され幼児を気持ちよくさせる。登場人物が移動する「道行き」の場面、仕事を楽しくする「労働歌」を歌ってみんなで働く場

面など、どの歌も調子のいい七五調で、自然に口をついて出た味わいがある。加古里子の里子はペンネームで本名は諭（さとし）であるが、高校時代の恩師、俳人の中村草田男との触れ合いを通し句会に出席するようになり諭を里子としたという。加古(2006b, 8)は「俳句をやったことは、絵本をつくる時にとっても役にたってますね。こういう内容を伝えたいんだけど、子どもさんの理解の中に入るかどうかということで、違う言葉に直す。そういう推敲のしかたを学んだことはありがたかったですね」と語っている。

『にんじんばたけのパピプペポ』では、なまけものだった 20 匹のこぶたたちが働き者になるという話だが、最初はやる気のなさそうな顔をしていたこぶたたちが、「だいたいいいも」（にんじん）を食べると顔がももいろに、そして働き者になり、みんなで井戸を掘る時「ぼくはすこっぷ、きみはくわ おいらはつちのはこびやく にんじんばたけのパピプペポ。きみはふんばれ ぼくほろぞ あなたもすごいちからもち にんじんばたけのパピプペポ」とこぶたたちが心地よいリズムで歌いながら働く。『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』では、音楽がとても好きな国の人々のお話で、祭りの風景が描かれ皆で音楽を奏でる。『ばいばいのののんどっちゃんこ』では、人間の赤ちゃんがはいはいし、「かえるちゃん」「かめちゃん」など、多くの動物が合流し、一行が進んでいく。「ぺたぺた ぺたすけ」「のそのそ のののん」それぞれが歩く様子を表す、楽しい言葉が続き、絶妙なリズム感を感じることができる。

『にんじんばたけのパピプペポ』『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』『ばいばいのののんどっちゃんこ』では、「言葉を使うことを楽しむ」と「ねらい」を設定できるだろう。

### 3-3 「額に汗することの価値を感じる」

遠い国の空想をかきたてる絵本は多いが、幼児の実生活や実感に近い内容のものも見逃せない。たとえば主人公が自立して働く姿を描いた絵本は、大人に囲まれて生きる幼児の実感に近い姿と言えるだろう。また幼児が「健全な勤労観」を身につける機会にもなるだろう。加古以外の絵本作家によるものから見てみよう。西内みなみ作、堀内誠一絵『ぐるんぱのようちえん』は、働くことを望む一人ぼっちの大きな象の「ぐるんぱ」を描いた絵本である。ビスケット店でも、お皿づくりでも、靴店でも、作るものが全て大き過ぎ、まるで役に立たない。やがて子どもが大好きな「ぐるんぱ」は幼稚園を開き、大きな靴で園児にかくれんぼうをさせ、大きな鼻をすべり台に使って幼稚園は大成功し、「ぐるんぱ」は働く喜びを感じるというものである。

加古の『からすのパンやさん』では、自営業で共働きのカラスのパン屋さんに4羽の赤ちゃんが生まれ、赤ちゃんが泣きだすとあやしに行ってパンをこがしたり、おしめを取り換える間にお客さんを待たせたりし、お父さんとお母さんは子育てにパン焼き、店の掃除など多忙を極めるが、それでもやさしく、大事に子どもたちを育てる姿が描かれている。パン屋さんの経営はなかなかうまくいかないが、成長した子どもたちのアイデアと手伝いで楽しい形のパンを作り評判が広まっていく。大人が働き、子どもたちがそれを手伝う。親子6羽のからすがみんなで丸くなってパンをこねる場面は心が温まる。

『からすのパンやさん』は、登場人物が子育てと仕事を両立させるきわめて今日的な絵本だが、同じく働く大人を描いた加古のデビュー作、『だむのおじさんたち』も注目に値する。現代では自然環境の保護という側面からダムは否定的に捉えられることが多く、この

絵本は廃刊となっている。松居(1978)の記録によると、福音館書店で『こどものとも』の編集をしていた松居が、絵本のテーマとして加古に「ダム建設」を依頼した 1950 年代は佐久間ダム、小河内ダム、黒部ダムなど多くのダムが建設され、停電の多かった当時の日本の戦後復興の象徴だった。その意味で加古のデビュー作『だむのおじさんたち』は、絵本の歴史的資料としても意義深いものである。松居は働く人に焦点をあててほしいという企画の趣旨を加古に伝えた。松居は労働を物語絵本で扱い、子どもが読んで楽しい作品に仕上げる作家は加古しかいないと考えていたのである。

作品を見てみよう。第 1、2 場面では、人間が山奥に入ってくるのを動物たちが心配そうに見守り、発電所を作るためにダム作りに来た旨が紹介され工事が始まる。動物たちが工事を手伝う場面が微笑ましい。第 5 場面で、自宅へ手紙を書くお兄さん、夜中に働くおじさんたちなど、労働の寂しさと厳しさが描かれる。第 6 場面で夜の情景、第 7 場面で赤とんぼの群れ、第 9 場面で桜の花びらを描き、日本的な美しさと詩情にもあふれている。加古(1959)は絵本の裏表紙の解説で「私がこの作品であらわしたいと思う点は、ダムを作った人々の苦労、よろこび、悲しみ、人間の労働のすばらしさ、日本的で現実的な美しさ、科学的なもの、人間味のある詩情との共存、子どもにもおとなの生活を知ってもらうこと」と述べている。この一節は科学者であり、民間企業の会社員であり、芸術家であり、子ども会の心優しいリーダーであった加古の持つ教育観を表したものと言える。『だむのおじさんたち』は働く人たちの感情と日本的な詩情を、現実の生活に根ざした発想で描き出した絵本である。

『からすのパンやさん』『だむのおじさんたち』では、額に汗することの素晴らしさ、大切さを幼児に伝えるという「ねらい」を設定できそうである。子育てをしながらパン屋を経営するという今日的な『からすのパンやさん』と、日本の経済の高度成長期に作られた『だむのおじさんたち』を比較するのも面白いだろう。

### 3-4 「自然と向き合う勇気を持ち、自分たちの環境について知る」

絵本は子どもたちに夢を与え心を癒すと同時に、子どもたちが抱える問い、たとえば大自然への驚きや恐怖心などに向き合う機会を与えてくれる。それは不安や怖れに立ち向かい、自分で答えを探す姿勢につながるだろう。科学者のキャリアを持つ加古の科学絵本にはそれらの要素が豊富に含まれている。加古は土壌学・地質学が専門で、同じく土壌学が専門だった宮沢賢治とある意味では同じ学問的なバックグラウンドを持っていると言える。たとえば加古は、宮沢賢治が「鳥百態」という詩の中の、田畑にいるカラスの描写に影響を受け、『からすのパンやさん』を製作している。

加古の科学絵本を見てみよう。『かわ』では、1本の川の上流から河口までを連続して描き、山から湾へと変化していく風景のなかに、生産を中心とした人間の営みが細かく描かれている。加古は『かわ』の製作意図にインタビューで次のように語っている。「モデルは多摩川、利根川と、それからめばしい各地域の大きな川ですね。いろんな地域の川に共通する特徴をきちっと押さえておきたいと思いました。(中略)川の背景やなんかを現代に合わせて、山奥と平野との違いを、子どもさんが自分の生活と対比できるように描こうと。それから川というものにまつわる、人々の生活ですね。川の流れるところに、たとえば水道、電気、また道だとか、まつわりつながっていくものがある。その社会的な広がりを見

でもらおうと思ったんですね。」(加古 2006b, 12) と述べている。

加古は『かわ』に続き、1969年には『うみ』を出版する。東大の海洋研究所に通い、海を多元的な絵本で描き出している。自分たちの住む地球の真の姿を理解する鍵は海にあると考えこの絵本を製作している。加古(1999, 158)は「そこにあったのは、自分の足元を見ようという問題意識だったと言って良いと思います」と、『うみ』の製作意図を語っている。古来自然を愛し自然との共存を旨として生きて来た日本人の持つ詩情と、科学を結びつけようとする加古の姿勢は、デビュー作『だむのおじさんたち』で示された初心と変わらないものである。

『かわ』『うみ』などの科学絵本においては、「自然と向き合う勇気を持ち、自分たちの環境を知る」と「ねらい」を設定することができるだろう。

### 3-5 「心と体のしくみを知り、大切にする」

加古の科学絵本に対する熱意は 1970 年代になり、子どもの心身の健康を願う作品となって結集することになる。加古は子どもたちの虫歯に関心を寄せていた。虫歯になるしくみをテーマにした『むしばミュータンスのぼうけん』では、きれいな歯についての食べ物のかすが虫歯菌になっていく様子が、黄色から緑、紫と毒々しい色で描写されている。『ほねはおれます、くだけです』では、元気に遊びまわることにより健康な子どもに育ててほしいという加古の願いがこめられている。『たべもののたび』では、栄養という黄色いトランクを持った食べ物たちが、ももいろトンネルやいぶくろ公園、小腸ジェットコースターなど、からだの中を遊びまわる食べ物の顔がいきいきと描かれている。

『むしばミュータンスのぼうけん』『ほねはおれます、くだけです』『たべもののたび』などの絵本では、「自分たちの体のしくみを知り、自分と仲間の心と体を大切にする気持ちを育てる」と「ねらい」を設定することができる。

### 3-6 「知ることの楽しさを経験する」

空想の世界に遊ぶこと、不思議なことを解決すること、そして言葉や知識を得ることは、幼児にとって区別のないことである。大人が記号化した文字や言葉を子どもに押し付けたのでは子どもは拒絶反応を示すだろう。言葉を少しずつ身につけ整理されていく過程を大切にすることが必要である。子どもは言葉そのものに興味を持ち、音の大きさや抑揚など全てに反応してイメージを膨らませていく。たとえば谷川俊太郎の『ことばあそびうた』、レオ・レオニの『あいうえおのき』、五味太郎の『ことばのあいうえお』など言葉遊びを描く知識絵本は高い支持を受けている。また『しょうぼうじどうしゃじぶた』(渡辺茂男作、山本忠敬絵)は、車のライトにちょっとした目の表情をつけ、走る姿をやや前かがみにすることで、車に生氣を与えて「じぶた」の物語に幼児を誘う。長谷川(1988)は、自分たちのグループを「じぶたグループ」と名付け、街を走る消防車を指さし「あっ、じぶただ！」と叫ぶ園児に言及し、幼児が絵本の中の消防自動車の働きに寄せる熱い共感を紹介している。これらは「消防自動車は火事を消す働きをする車」というような機械的に結び付けられた知識ではなく、「じぶた」という音から入り、その音に感情移入することにより得られた知識ということである。

加古の『くまちゃんのいちにち』では、日々のささやかなあいさつを忘れず、大人が優

しくしっかり子どもをしつけ、四季をぞんぶんに味わい、生活を楽しんでいる「くまちゃん一家」がしみじみと描かれた作品である。また『あなたのいえわたしのいえ』は、雨や太陽を防ぐ屋根、風をさえぎる壁、大切な出入り口など、普段意識せずに住んでいる家には人の知恵が数多く生かされていることを伝えている。

加古の知識絵本は、幼児が「知る」ということには、心のときめきがなければならないことを教えてくれる。『くまちゃんのいちにち』『あなたのいえわたしのいえ』などの絵本では、子どもの好奇心を尊重し「知ることの楽しさを経験する」と「ねらい」を設定できる。

#### 4 おわりに

本稿では、保育者が保育の現場で絵本を読み聞かせる際の「ねらい」に着目し、加古の絵本を「読み聞かせの教材」として考えた場合、どのような「ねらい」で幼児に読み聞かせることができるかを検討した。そして加古の絵本を基にして「仲間と遊ぶ楽しさを味わう」「言葉を使うことを楽しむ」「額に汗することの価値を感じる」「自然と向き合う勇氣を持ち、自分たちの環境を理解する」「こころと身体のおもしろさを知り、大切にすること」「知ることの楽しさを経験する」などの「ねらい」を設定して絵本の読み聞かせを行なう可能性を探った。保育者が幼児に「思い」を伝える一助となれば幸いである。

「絵本の読み聞かせ」は、ページをめくるときの紙のこすれる音、仲間の息使い、空間への立体的・身体的な関わりなど、デジタル化された平面的な現代社会で失われつつある人の五感に訴える感覚刺激する経験を幼児に与えてくれる。そして人と人とのやりとりのなかで言葉を味わうことができる。保育者と幼児が目と目を合わせて同じ時間を過ごす絵本の読み聞かせ活動の意義はより高く評価されるべきで、その価値を今後も探っていきたい。

#### 引用・参考文献

- 今井良朗・中川素子 2001『絵本の視覚表現』日本エディター・スクール。  
長谷川摂子 1988『子どもたちと絵本』福音館書店。  
加古里子 1959『だむのおじさんたち』福音館書店、裏表紙の解説。  
\_\_\_\_\_ 1962『こどものとも』76号、福音館書店。  
\_\_\_\_\_ 1979『日本の子どもの遊び上・下』青木書店。  
\_\_\_\_\_ 1987『おはなし聞かせて』草土出版。  
\_\_\_\_\_ 1993『かこさとしの食べごと大発見 第1巻』農村漁村文化協会。  
\_\_\_\_\_ 1999『加古里子 絵本への道』福音館書店。  
\_\_\_\_\_ 2006a『伝承遊び考』小峰書店。  
\_\_\_\_\_ 2006b『絵本の作家たち』『別冊太陽』2006年5月号、平凡社。  
香宗我部秀幸 他 2012『絵本をよむこと』韓林書房。  
スミス、L.H. 1964『児童文学論』石井桃子、瀬田貞二(訳)、岩波書店。  
松居 直 1978『絵本をみる眼』日本エディター・スクール出版部。

- \_\_\_\_\_ 2010「私のことば体験」『母の友』8月号、福音館書店。
- 佐藤智恵・松井剛太・上村眞生他 2007「保育者の絵本の選択の理由と経験年数との関連に関する研究」  
『幼年教育研究年報』29: 59-64.
- 渋谷清視 1983『絵本と童話』文化書房博文社.
- 矢野光恵 2013「保育における読み聞かせの在り方と絵本の活用に関する一考察」『児童教育研究』22:  
57-59.
- 横山真貴子・秋田喜代美 2001「保育における読み聞かせはどのように熟達するのか」『人間文化論集』:  
59-73.
- 和田香譽 1995「保育者の絵本選択の意図に関する研究」『日本保育学会第48大会発表論文集』: 550-51.

### 参考資料

「日野市の5歳児（園児）が親しむ童話・絵本のベスト50」『就学前教育と小学校教育の連携、学びの連続性、育ちの連続性を目指して』東京都日野市教育委員会、2010年3月。

### 絵本

- 五味太郎 1979『ことばのあいうえお』岩崎書店.
- 加古里子 1959『だむのおじさんたち』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1962『かわ』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1967『だるまちゃんとてんぐちゃん』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1969a『あなたのいえわたしのいえ』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1969b『うみ』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1973a『からすのパンやさん』偕成社.
- \_\_\_\_\_ 1973b『くまちゃんのいちにち』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1973c『にんじんばたけのパピプペポ』偕成社.
- \_\_\_\_\_ 1973d『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』偕成社.
- \_\_\_\_\_ 1976a『むしばミュージアムのぼうけん』童心社.
- \_\_\_\_\_ 1976b『たべもののたび』童心社.
- \_\_\_\_\_ 1977『ほねはおれますだけです』童心社.
- \_\_\_\_\_ 1987『だるまちゃんととらのこちゃん』福音館書店.
- \_\_\_\_\_ 1996『ばいばいのんのどっちゃんこ』小峰書店.
- レオ・レオニ 1975『あいうえおのき』谷川俊太郎（訳）、好学社.
- 西内みなみ作、堀内誠一絵 1965『くるんぱのようちえん』福音館書店.
- 谷川俊太郎作、瀬川康男絵 1973『ことばあそびうた』福音館書店.
- 渡辺茂男作、山本忠敬絵 1966『しょうぼうじどうしゃじふた』福音館書店.

### 謝辞

常日頃ご指導をいただいている越谷保育専門学校の先生方、また授業運営の環境を整えていただい

る職員の皆様に、この場を借りて感謝の意を申し上げます。